

### 鳥類の体における変異量の分布 清水 三雄 (信州大・教・松本分校)

燕雀目鳥類 24 種につき、頭骨、胸部、肢の骨などの大きさの平均値、標準偏差 ( $\sigma$ )、変異係数 ( $V$ ) を算出し、更にそれ等の 24 種の平均値を算出して鳥体における変異量の分布を検討す。

大きさによる階梯と  $\sigma$  による階梯とは略々平行的な関係にあり、前者と  $V$  による階梯との関係は略々逆比例的な関係にあるけれども前の関係ほどには明らかでない。ニワトリで大きい骨ほど早く化骨することは上の関係と関連して興味がある。前肢にある  $\sigma$ -階梯は成長階梯と一致するが、後肢にあるそれは何れの成長階梯とも一致はみられない。

同じ骨の変異量の種間関係は次の通りである。 $\sigma$  は一般に大きい鳥ほど大きい傾向があるが、 $V$  にはこのような規制的な関係はみられない。また、肢の  $\sigma$  と肢を構成する骨の  $\sigma$  の和との間には略比例的な関係があるが、 $V$  については和は増加するにもかかわらず、肢の  $V$  には種により余り差はみられない。

### カササギの産卵と死亡 久保 浩洋 (佐賀大・文理・生)

カササギのひなの巣内調査によって、卵およびひなの生息数についての多少の結果をえた。1 巣当りの平均産卵数は 4.87、卵より巣立ち直前までの生存率は約 22% なる値を示した。ただし、これらの数値は繁殖期の一部の期間の調査にもとづくものであって、はたして、これらがカササギの繁殖期全期間に適用できるかどうかは今後の問題である。なお巣立ち時期以降の死亡数をマーク鳥の生息数から推定した所では、巣立ち直前より 1 年後の若鳥の生存率は約 26—30%、2 年目より 4 年目までの年平均生存率は約 73% という結果を得た。これらの値をもちいて描かれた生存曲線は直線型となるように思われる。

### オオルリのテリトリー III 白附 憲之 (広島大・理・動)

オオルリ (*Muscicapa cyanomelana cyanomelana*) のテリトリーの拡がりは 500—1000 m<sup>2</sup> もあり、そのなかで 1 対の♀♂が生活し繁殖する。テリトリー防衛のファイテングは初期ほど強く、ヒナの巣立ちとともにきえる。これらのことがどの個体においても認められオオルリ社会において一つの制度としてのテリトリー制をなしている。すると社会的にみて♂個体のみ注目しないで♀個体をも含めた関係においてこの制度を理解する必要がある。テリトリー形成期にベアー・フォーメーションがおこなわれる。♀が他の♀に近づくとき♂をアタックするよりも♀をテリトリーとなる内にとどめる行動をなし、ついで♂をテリトリーとなる地域から追いだす。ベアーがきまるとテリトリーは確立し他の♂個体の侵入はできなくなる。これらのことより、社会的にみてテリトリーは空間をわかちあう安定の原理であるとともに、繁殖のために有利な♀の確保の制度であるといえる。

### ムクドリの日時行動とその影響要因について 黒田 長久 (山階鳥研)

ムクドリ *Sturnus cineraceus* の日時について日時位置 34 回、採食地出発 76 回の観察から、その時間を左右する要因を考察した。1) 距離が遠いと出発が早い、出発前の休止時間を短縮して必要採食量を保持する。2) 冬寒い日は長く採食し休止時間を短かくし遅く出発し、暖かい日は反対に早い。3) 日時は秋冬は遅く、春長日となると早くなる。4) 秋とくに食物の多い時や場所では飛去が極めて早い。5) 曇天には晴天より飛去が早い。6) 飛去照度は初期 (最高)、平均、最終 (最低) の 3 段階を認め、某照度で飛去した羽数と頻度の積を飛去照度指数とした。冬初期の最高は 28,000 Lux (40 km., 日没 58 分前)、平均は、4,000—2,000 Lux が距離にかかわらず多い。7) その他社会性要因もある。結局 1 日の採食必要量によって飛去時間が決まり、多くの外的条件及び生理的状態がその変更要因となる。しかし繁殖期の就日時時間は全く親の巣や雛に対する執着の強さに左右され、抱卵育雛期に最も遅く、雛巣立ちとともに著しく早くなる。